

愛校心は、学校生活を本当に良くするのか

2月の生活主題 「平和」・・・愛校心を養おうから考える…

はじめに「愛校心を養おう」という言葉を、学校で耳にしたことがある人は多いと思います。けれども、「学校を大切にしよう」「好きになろう」と言われても、なぜそれが大事なのかを考える機会は、意外と少ないのではないのでしょうか。そこで今回は、次の仮説を立てて考えてみます。

仮説

愛校心が高まると、学校生活はより安全で、気持ちよく、学びやすくなる。本当にそう言えるのでしょうか。学校生活の中のいくつかの場面から検証してみましょう。

検証① 学校の「もの」の扱い方

教室の机やイス、トイレ、廊下、体育館。これらはすべて、今の自分たちだけでなく、次に使う人のためのものでもあります。もし、「どうせ自分のものじゃない」と考えて乱暴に扱えば、壊れたり、汚れたりし、使いにくくなります。その結果、困るのは次の誰か、そして未来の自分たちです。

一方、「この学校を大切にしたい」という気持ちがあれば、自然と行動は変わります。

- ・物を丁寧に扱う / ・きれいな環境が保たれる / ・安心して生活できる

この流れは、仮説を支えていると言えそうです。

検証② 人との関わり方

学校は、たくさんの人が同じ時間を過ごす場所です。友達、先輩、後輩、先生。愛校心とは、「学校そのものを好きになる」だけでなく、そこにいる人たちを大切にしようとする姿勢でもあります。挨拶をする、相手の立場を考える、困っている人に声をかける。こうした行動が増えると、クラスや学年の雰囲気はどうなるのでしょうか。

・安心して話せる / ・無用なトラブルが減る / ・自分も大切にされていると感じられる
人を大切にする行動は、結果として自分の居場所を守ることにつながります。ここでも仮説は成り立っていそうです。

検証③ 学びへの向き合い方

「この学校で学んでいる自分」をどう捉えるかも大切です。愛校心がある人は、「せっかくこの場所で学ぶなら、意味のある時間にしたい」と考えるようになります。すると、

- ・授業に集中しようとする / ・行事に本気で取り組む / ・失敗しても投げ出さない

といった姿勢が生まれます。**学びの質は、環境と気持ちの両方で決まる**のです。

考察

検証を通して見えてきたのは、愛校心は、心の中だけの話ではなく、行動として表れるものだという事です。そしてその行動は、

- ・学校を使いやすくする
- ・人間関係を穏やかにする
- ・学びを深める

という形で、自分自身に返ってくるのです。

おわりに、愛校心とは、「無理に好きになること」ではありません。「**ここで過ごす時間を、少しでも良くしよう**」と考え、**行動すること**です。今日の自分の行動は、明日の学校、そして明日の自分をつくります。まずは、身近な一つから。その積み重ねが、**学校を支え、あなた自身を支える力**になります。

「夢」は時代がくれるものではない

Vol.27でお伝えした百瀬昭次さんの「君たちは偉大だ」から、「夢」という文章を紹介します。

今の世の中には、よく夢がないといわれます。確かに「青雲の志」とか「Boys be ambitious (少年よ！大志を抱け)」などと口にすれば、すぐにシラケルなどと言われかねない世の中です。ある新聞社の、若い人たちの意識調査を行った結果を見ても、「趣味を生かし、その日その日が楽しく暮らせればよい」というような、老人化した人生観が主流を占めています。では、この世の中には夢をもった人がいないのかと言えば、決してそうではありません。素晴らしい夢を描き、その実現に没頭している人たちもいるのです。ただ夢を描いていない人のほうが圧倒的に多いので、そんなに目立たないだけです。

例えば、大アマゾンのどまん中にオートバイ工場を建てて、アマゾンの将来に自分を懸ける青年実業家、ロンドンでイギリス人のために琴の教室を開いた若い女性のお師匠さん、韓国で孤児を育てる仕事に情熱を傾けている若いご夫婦、交通事故で首から下が不随になったショックにも負けず、口で筆をとって素晴らしい詩や絵の創作に心を打ち込んでいる青年など、今の世の中にも夢をもって、それを実現しようと充実した人生を歩んでいる人たちは少なくないのです。このことは何を意味するかといえば、夢は時代によって生まれたり生まれなかつたりするものではないということです。日本や世界の歴史を紐解いてみればわかるように、どんな時代でも、必ずその時代に即応した偉人がたくさん出現しています。戦国時代といった乱世にも、人間性が抑圧された封建時代やファシズムの時代でも、それぞれに夢を持った偉人が出てきています。では、それらの時代のほうが、現代よりも夢の多い住みよい社会だったかといえば、決してそうではありません。

そもそも、夢のない時代ということ自体がおかしいのです。夢は時代が与えてくれるものではなく、人びとがその時代を直視して、その中から夢を見つけだしていくものです。主体は時代にあるのではなく、あくまでも私たち人間にあるのです。「夢はない」と諦めてしまえばそれまでですが、「夢はある」ものと思えば、おのずから夢は見つかるもので、要は人の心のもち方です。

現代の夢は無数に転がっています。夢は傍観しているだけでは、ただの石ころにも劣ります。自分の中にそれを引き入れて実現しようと決意した時に、はじめて夢となり、燦然と光り輝くものなのです。現代のように混迷化した情報化時代に、難問が山のように横たわっている時であればこそ、私たちは夢を持たなければならないと思います。そしてその実現に向かって力を傾けるべきです。人間の歴史は、いわば人間の描いた夢の歴史といってもよいでしょう。その時代、時代の人々がどんな夢をもっていたかによって、その時代が創り上げられ、次の時代が生まれてくるのです。この繰り返しが歴史であるといえるでしょう。従って私たちが絶えず夢をもちつづける限り、いかに激動の変革期であっても、必ず人間は乗り越えていくでしょう。そして次の時代がどんな時代になるかは、若い人たちの夢の描き方によって大きく左右されるものです。幕末動乱期に、大活躍した土佐の藩士：坂本龍馬(1853~1867)は、次のような言葉を残しています。

「世に生を得るは事を為(な)すにあり」と。わずか32歳で非業の死をとげた龍馬もまた、人生の手本を示してくれた人間の一人です。自分の描いた大きな夢に向かって、彼は全てのものをかけて邁進した、そんな爽やかな生き方を、龍馬の言葉は教えているように思います。爽やかな生き方ということは、この世の中にもって生まれてきたものを、すっかり使い果たして、全部お返ししていくことに、ほかなりません。自分に与えられたもち場で、自分のもっているすべてを燃焼させ、自己の使命を全うしていった坂本龍馬のように、自分の生命を燃やし尽くし、使い果たすような悔いのない人生が、きっとみなさんの前に開けてゆくことを、心から信じています。最後に、私の言葉を添えておきます。

人生には希望はあっても失望はない！大いなる夢を描け！

それは必ず実現する！あなたたちには無限の可能性があるので。